

## シャルル・ル・ショーヴ、八四〇年：ヴェルダン条約前史：二

森, 洋

<https://doi.org/10.15017/2233867>

---

出版情報：史淵. 119, pp.137-164, 1982-03-31. 九州大学文学部  
バージョン：  
権利関係：

# シャルル・ル・ショージュ、八四〇年

—ヴェルダン条約前史— 二

森

洋

## VI

八三八年に、新たにシャルル・ル・ショージュの取り分として指定された部分は、トゥール大司教管区（ルグドゥネンシス第三）に集中し、その中で特に問題となるのは、トゥール、ル・マン、アンジエ、ナントの四司教管区である。

21、この際その境界線上で問題となるのはシャルトル（サンス大司教管区）であるが、ここでは、八三七〜八四〇年の司教を特定し得ない。<sup>123</sup> 管区内のボンヌヴァル *Bonneval*, *Bonavallis* 修道院の初代院長ガウスマルス *Gausmarus* は、シャルル・ル・ショージュに対して、「最も困難な時期に」忠実であったようであるが、この修道院自体の設立は八四一年以前に遡り得ない。<sup>124</sup>

22、トゥール大司教ウルスマルスの名は、後述するル・マン司教アルドリクスの、八三七年四月一日付の二文書に見られる。ついで彼は八四六年六月のエペルネイ公会議に、彼の属司教群をひきいて出席している。<sup>126</sup> 当該管区にはサン・マルタン *Saint-Martin*、マルムーチエ *Marmoutiers*, *Majus Monasterium*、コルマリクス *Cornarius*

の三修道院がある。当面する時期のサン・マルタン修道院長は、八三四年以降、マルムーチエと同じく、アラール Alard, Adalarus であつた。<sup>127</sup> 彼はルイ・ル・ピウの *senéchal* であり、八三七年から八四三年にかけて、終始シャルル・ル・ショージュの側にあつた。家系上彼は、パリ伯爵ジェラルの兄弟であつたし、さらにジェラルの離反後は、パリ伯に就任したものと思われる。<sup>128</sup> さらにサン・マルタンにおける彼の後任ヴィヴィアン Vivien, Vivianus や、マルムーチエにおける後任ルノーが、何れも俗人修道院長位を有していたが故に、それぞれトゥール伯、ナント伯と認められていることを思えば、アラールが少くとも一時期トゥール伯であつた可能性もある。彼はまたサン・マルタン修道院で、八四〇年に二つの足跡を残した。一つは、アルクウィヌス以来栄えた当修道院の学校教育の無料化<sup>130</sup> であり、一つはコルマリクス修道院長アウダケル Audacher とフレデリックなるものとの間に行われた *villae* 交換の確認である。アウダケル修道院長は、フェリエール修道院長ループスの血縁者 *consanguineus* と見られている。<sup>131</sup>

23、ル・マン司教聖アルドリクスについては、その弟子たちが記した《Gesta Aldrici》によって、豊富な知識が与えられる。<sup>132</sup> 彼の父シオン Sion はフランク又はザクセン人、その母ゲリルディス Gerildis はアラマン又はバイエルン人で、その血は王家につながっていると云われる。事実彼は宮廷学校で育ち、メッス司教ドロゴ Drogo に品級を授けられて、その司教座聖堂付参事会の一員となつた。ルイ・ル・ピウは彼を告解司祭としてゐる。八三二年にル・マンの司教座があくと、ルイ・ル・ピウはこの座を彼に与え、彼は当時のトゥール大司教ランドランヌス Landranus の聖別を受けた。アルドリクスは、すでにメッスで養成した弟子たちを連れてル・マンに入つたが、ここで直ちにサン・カレール Saint-Calais, S. Carileus 修道院と事を構えざるを得なくなつた。この修道院は司教に対して、あらゆる面での完全な独立を主張していたのである。八三八年四月に、ルイ・ル・ピウの介入によって、司教とサン・カレール修道院長ジギスムント Sigismund との争いが顕在化し、事は両者の主張を裏づける教会法とローマ法 *canones et leges* 及びメロヴィング家のそれに遡る文書類の真偽をめぐる争いに発展した。シャルル・ル・ショージュが割当

てられた時期のル・マンは、教会法と文書類の偽造の「一大アトリエ」だったのである。<sup>133</sup> 八四〇年のルイ・ル・ピウの死は、サン・カレー修道院をロテール側につかせ、アルドリクスはル・マンから亡命して、シャルル・ル・ショールと行をと共にせざるを得なくなった。八四一年八月のフォントノワの戦いの後、彼はようやくル・マンに帰ったが、サン・カレー修道院は八五五年ボンヌイユ Bonneuil の会議で、独立を保証する文書を獲得し、これにはトゥール、サンス、ランス、ルーアンの四大司教を含む四一名の司教・修道院長が副署した。<sup>134</sup> アルドリクスは、八五六年一月に歿した。当該管区には、上記サン・カレーの他、<sup>135</sup> サン・ヴァンサン Saint-Vincent、S. Vicentius、サン・ピエール S. Petrus de Cultura、エブロイヌム Ebroinum の三修道院があるが、<sup>136</sup> その何れについても当該時期の修道院長は不明である。

24、アンジェ司教ドドの名の初出は、八三七年四月一日のル・マン司教アルドリクスの文書である。これに先立って彼は八三三年以後、アキタニア王ピピンの文書局長であった。<sup>137</sup> それにもかかわらず彼は、一貫してシャルル・ル・ショールグの側にあった模様で、八七二年四月一六日の文書にいたるまで、彼は多くの王文書に言及されている。八七九年十一月九日歿。

当該管区にはサン・トールバン Saint-Aubin、S. Albinus 修道院があり、その修道院長エブロイヌス Ebroinus<sup>139</sup> は、八二九年から八三三年にこの職に就くまで、ピピンの文書局長であり、ドドの前任者であった。彼は当時のル・マン伯ロルゴン Rogon の従兄弟であり、<sup>140</sup> ロルゴン家系に属する。ルイ・ル・ピウの最晩年に彼は、この皇帝と息子ピピンの和解に努め、その功と、ロルゴン伯の口ぞえとによって、同じ司教管区に属するグランフィユ Glanfeuil、Glannafolium、サン・モール・シュル・ロワール Saint-Maur-sur-Loire 修道院長位を、同じくロルゴン家出身のガウスベルトゥスの後を襲って得た。彼は八三九年にはポワチエ司教となり、間もなくサン・ティレール

Saint-Hilaire, S. Hilarius 修道院長位を得たらしい。ポワチエ司教としての彼は、シャルル・ル・ショージュの宮廷司祭長 archichapelain を兼ね、従って王に最も影響を与えやすい立場にいた。八五四年歿。彼の家系は同時にポワチエ伯ラニエール一世 Rannulf I (Rannoux I) につながり、後者はアキタニア王ピピンの義兄弟ジェラルの子である。<sup>141</sup> サン・ティレールとグランフィユの両修道院長位は、ほぼこの家系の出身者によって占められ、サン・トールバンのそれは、エプロイヌスの前がルイ・ル・ピウの文書局長エリザカル Heilsachar<sup>143</sup>、エプロイヌスの後は、ランベール伯 Lambert, Lambertus comes である。<sup>144</sup> ランベールは、いわゆる「ギイ・エ・ランベール家系」に属し、当時おそらくはナントとアンジェの伯を兼ねていた。この一連の修道院長名は、サン・トールバン修道院の重要性を示している。サン・フロラン Saint-Florent, S. Florentius 修道院長は、当時ガウスベルトゥス Gausbertus であるが、この人物は、グランフィユ修道院長、あるいは後にランベールと争うにいたる、ロルゴン家出身のル・マン伯ゴスベル Gausbert, Gaubert と同一人物であろうか。<sup>145</sup>

25、ナント司教聖グンハルドゥスは、<sup>146</sup> 八三七年四月一日に、ル・マン司教アルドリクスの「遺書」<sup>147</sup>に副署している。彼は八四三年六月二四日、ノルマン人によって司教座教会堂で殺された。

123 G. C., VIII, col. 1102-1103, D. F., II, p. 429. Bernoinus は八二九年のパリ第六公会議から八三六年までその跡を追える。彼をついだ Helias は、八三五年には presbyter であり、D. F. は八四五年四月（ボーヴェー公会議）を司教としての初出とする。G. C. は「八四〇年頃に開かれたサンス公会議」で、故サンス大司教 Aldricus の文書をサンス司教 Wenilo が確認した際、Helias は司教として副署したと記しているが、当該公会議の開催は八四五年である（Hefele-Leclercq, *op. cit.* IV-1, p. 120）。G. C. はまた、Mabilon 74, AA. SS. O. S. B. では、八四一年頃のシャルトル司教として、Gillericus あるいは Valentinus を採用しているが、*Annales* では採っていない。

124 G. C., VIII, col. 1234, 1236.

125 G. C., XIV, col. 35-37, D. F., II, p. 311. 八三十四年一日付アムドリンヌの二文書に於て *Gesta Aldrici Cenomaniensis episcopi*, P. L., t. 115, col. 55-59, 60-65, cc. XXXIX, XXXI.

126 BORETUS-KRAUSE, *Capitularia*, II, p. 261, n° 257.

127 G. C., XIV, col. 164-165, 198. フニヤーチキに於て G. C. は彼を一代に数えてゐない。ただその前代の Theoto の死（八三四年）を Raimaldus の書に（八四四年）その間を推論してつづめてゐたのみで、しかるこれをマユモンが認めつてならぬとせしむる（Cf. MABILLON, *Annales*, II, p. 600.）といふ Lor (F.), *Mélanges carolingiens*, V, Note sur le senéchal Alard, p. 593. 此のうたは誤つてゐる。カン・フニヤチに於て彼の前任者たる テクトルはなほ Frigidusus にあつて 福地氏の一族に属する。

128 LEVILLAIN, Les comtes de Paris, p. 193 et n. 191, p. 197-198.

129 G. C., XIV, col. 165, 169. フニヤーチキに於て フニヤチンがあらはれるのはその後で（Cf. MABILLON, *Annales*, II, p. 615.）あらはれるといふは、その名の「Renaud et Hervey」の家系に属する。彼らの家系及び俗人修道院長職と伯爵職との關係については DRONDT (J.), *Études sur la naissance des principales territoriales en France (IX<sup>e</sup>-X<sup>e</sup> siècles)*, Brugge, 1948, p. 86 et nn., p. 88, 92, 93, 322 et suiv. を參照せよ。

130 G. C., XIV, Instr., col. 28-29, n° XXII.

131 G. C., XIV, col. 256, Instr., col. 27-28, n° XXI.

132 G. C., XIV, col. 357-360; D. F., II, p. 342-343. *Gesta Aldrici*, P. L., t. 115, col. 29-106.

133 *Gesta Aldrici*, cc. XLIII, XLVII, P. L., t. 115, col. 77-87, 88-89; BÖHMNER-MUNDBACHER, *Regesta*, S. 395f. Nr. 976 (945), S. 397f. Nr. 980 (949), S. 398f. Nr. 982 (951). この野に轉写したのは藤谷英成氏の「*Capitula Angliorum*」, 《*Faux Capitulaires* [du diacre Benoît]》, 《*Fausses Décretiales* [d'Issidore de Séville]》に於て。特に最後の方の「マ・フニヤチ」の語は「*Capitula Angliorum*」の「*Capitula*」に於て「*Capitula*」とある。Cf. Fournier (P.) et Le Bras (G.), *Histoire des collections canoniques en Occident depuis les Fausses Décretiales jusqu'au Décret de Gratien*, t. I, *De la Réforme carolingienne à la Réforme Grégorienne*, Paris, 1931, réimp., Darmstadt, 1972, p. 183-201, surtout p. 200. 《*Gesta Aldrici*》の轉写——Aldricus 直訳の「*aldricus*」——といふのは、その大體の轉写に於て「*aldricus*」とある。Haver (J.), *Questions Mérovingiennes*, IV, Les



八三九年五月、ヴォルムスにおけるシャルル・ル・ショージュの最大の収穫は、八一七年以来アキタニアの一部としてピピン一世に与えられていたヌヴェール（サンス大司教管区）とオートタン（リヨン大司教管区）とが、アヴァロンとともに彼に約束されたことである。リヨン管区からはその上、ラングル、シャロン・シュル・ソーヌ、そしておそらくはマコンが彼に帰属し、このことは、リヨン大司教アゴバルの大抵抗を生んだ筈のものである。<sup>148</sup>

26、リヨン大司教アゴバルは亡命ヴィジゴート人であり、八〇四年にリヨンの *chorepiscopus* に選ばれ、八一六年に大司教となった。彼は当代随一の理論家であり、彼の提言はその何れをとっても時代を超えていた。例えば帝国と教会の完全な一致と、それに基く帝国統一法適用の要求、法廷決闘禁止の要求等がそれである。彼は従って、ローマを本拠とし、教皇から冠をうけた皇帝ロテールの側に立ち、八三三年のサン・メダール・ド・ソワソンの痛<sup>ベ</sup>悔文の執筆者として、ルイ・ル・ピウの復位後は、八三七年までロテールの許に亡命を余儀なくされた。その間大司教職を代行したアマラリウス *Amalaricus* と彼は、典礼をめぐる争った。彼は八四〇年六月六日、ロテールの遠征に随行中に、サントで歿した。当該管区には、アニアーヌのベネディクトゥスが創建したリール・バルブ *Isle-Barbe, Insula Barbara* 以下、エネィ *Ainay, Athanacum*、サン・ランベール *Saint-Rambert*、サヴィニ *Savigny, Saviniacum*、アンブローニ *Ambournay, Ambronay, Ambroniacum* の五修道院がある。<sup>150</sup> これらのうち、エネィとサヴィニとは、シャルル・ル・ショージュ寄りではなかったかと思われる節がある。<sup>151</sup>

27、ラングル司教管区とその周辺とは、八三七年と八三九年の関係史料において、何れも司教管区名を用いず、*pagus* や *comitatus* 名が用いられていたことはすでに述べた。司教は、八二〇年頃から八三八年十二月二日までアルベリクスであり、彼はまたディジョン *Dijon* のサン・テティエンヌ *Saint-Etienne, S. Stephanus* の修道院長



でもあった。彼の後継者とみられるテウトバルドゥスは、八四二年にならないと現れないから、我々は八三九〜八四一年の司教を特定し得ない。他方ディジョンのサン・ベニーニョ Saint-Bénigne, S. Benignus 修道院長インゲルラムス Ingelramus は「ロテール皇帝の第一年」（八四〇年）に《episcopus et abbas》と呼ばれているから、この時期に限って彼をラングル司教とみなし得るかも知れない。しかし彼は、「シャルル・ル・ショージュ治世の第六年」（八四五年）には、《chorepiscopus》<sup>153</sup>としか呼ばれていないから、彼はディジョンにあって、終始この称号のみを保有していたとも考えられる。その他ムーティエ・サン・ジャン Moutier Saint-Jean, Reomanus et Reomus 修道院長モドイヌス Modoinus は、<sup>154</sup>すでにオータン司教であった。その他この管区にはサン・セーム Saint-Seine, S. Se-quanus 以下三修道院があるが、この地方の、ラングル、ディジョン、オータン、さらにシャロン・シュル・ソーヌをも加えた教会勢力の均衡には、極めて微妙なものがあったことを、我々は推測することが出来よう。

28、シャロン・シュル・ソーヌ司教は、八三七年まではフォヴァであり、後任司教ゴデルサドゥスは八四一〜八四二年にシャルル・ル・ショージュによって、「王の父祖の慣習に従って」宮廷から選ばれ、八四三年に聖別された。<sup>156</sup>

G. C. はこの兩人の間に、一切のコメントをつけずにミロ Milo の名を挿入したが、我々はこれを採用する理由をもたない。<sup>156a</sup>当該管区にはサン・ピエール Saint-Pierre, S. Petrus Cabillonensis、サン・マルセル・レ・シャロン Saint Marcel-lès-Chalon, S. Marcellus の二修道院があるが、<sup>157</sup>後者の修道院長は八三五年以来シャロン伯ゲラン Guérin, Warinus, Garinus であり、彼は八四一年一月以降、シャルル・ル・ショージュの側に立って重要な働きをすることになる。

29、マコン司教ヒルディバルドゥスについて、G. C. は八一四年から八五〇年まで、D. F. は八一四年から八三〇年までその存在を認めている。<sup>158</sup>八三〇年から八五〇年にいたる二十年間の採否については、何れにも充分な説明が行わ

れていない。しかもその後継者ブラインディングス Brandingus, Brendicus の在職期間は、G. C. D. F. の何れもが八五三年～八六二年としているから、結局八三九・八四〇年前後のこの司教座は、空位であったと考えねばならぬであろう。そしてこのことが、史料上にこの管区の名を残さなかった原因であったかも知れない。ヒルディバルドゥスについて注目すべきは、八二五年に同司教が伯ゲランとの間で、Cluniacum その他の villa を交換していること<sup>160</sup>で、ここからこの伯をマコン伯とし、さらにシャロン伯にしてサン・マルセル・レ・シャロンの俗人修道院長であるゲランと一致させることについては、疑問の余地がない。サン・ローラン・レ・ブロン Saint-Laurent-lès-Mâcon 修道院は、八三〇年には、ブレス Bresse 辺境伯にしてバジェ Bâgé 伯でもあるユーグ Hugo, Wigo の手にあつた。<sup>161</sup>我々はこちらで、八三九年におけるシャルル・ル・ショージュの最大の収穫である、オートン、アヴァロン、ヌヴェールの三伯管区<sup>162</sup>の考察に移らねばならぬ。アヴァロンはオートン司教管区に属していたから、司教管区はオートンとヌヴェールとに限定される。これらはブルジュ（アキタニア第一首都大司教座）とともに、何れも八四〇年のシャルル・ル・ショージュの動向に、重大な役割を演ずることになる。

ルイ・ル・ピウの死後、シャルル・ル・ショージュはまずブルジュで集会を開き、ついでトゥールに向うが、恰度その時期にあたる八月一日付の、フェリエール修道院長ウードの書簡（オルレアン司教ヨナス宛）<sup>164</sup>は、この王の行程を予告するとともに、これに先立つアキタニアでの動向を伝えている。八月一日に、同修道院の homines がアキタニア遠征から帰着して、アキタニア防衛 Aquitaniae tutela が三グループによって行われたことを伝えた。第一はクレルモンにあり、オートン司教モドイヌスとアヴァロン伯オーベル Autbertus, Aubert の指揮下にある。第二はリモージュにあって、故ピピン一世の義理の兄弟ジェラルール Gerardus, Gérard その他の指揮下にある。第三はアングレームにあって、ルノー Reinoldus, Reinold, Renand 伯の指揮下にある。

このことは、八三九年の軍事行動によって、ルイ・ル・ピウとシャルル・ル・ショージュがアキタニアの何処まで入

れたかを示すとともに、オータン司教とアヴァロン伯とが直ちにビピン側から離れて、ルイとシャルルの側についてことを示している。

30、この時期のオータン司教モドイヌスは、<sup>165</sup>八一五年から姿をあらわし、八三五年のティオンヴィルでは、ランス大司教エボを裁く、三人の *iudices electi* の一人であった。彼は当時の宮廷文人テオドゥルフス *Theodulfus*、ヴァラフリドゥス・ストラボ *Walafridus Strabo*、フロルス *Florus* 等との交友で知られている。歿年は明らかではないが、前記サンス大司教等からリヨン大司教に宛てた八四二年二月の書簡が、<sup>166</sup>「最近のオータン教会の不幸と永い混乱」に言及し、早急に教会の頭を選任すべき必要を説いているところから、彼の死は八四〇年末か八四一年のことと考えられる。当該管区にはフラヴィニィ *Flavigny*, *Flavinicum* 以下多数の修道院がある。フラヴィニィのアデヴァルドゥス *Adevaldus*, *Areuvaldus* 修道院長は、ルイ・ル・ピウの下でしばしば使節に任ぜられ、八四〇年に歿した。<sup>167</sup>シャルル・ル・ショージュは、モドイヌス司教の後任アルテウス *Altheus* に対して、モドイヌスが八一五年にルイ・ル・ピウから取得した文書——当該司教座教会堂の所有と、これに帰属する修道院に対する *immunitas*——を、八四三年に確認したが、それらの修道院は、サン・タンドーシィ *Saint-Andoche-le-Puellier*, *S. Andochius*、サン・ピエール及びサン・テティエンヌ *Saint-Pierre et Saint-Etienne* (*l'Etrier*), *S. Petrus seu S. Stephanus*、ソリーウのサン・タンドーシィ *Saint-Andoche de Saulieu*、セルヴォンのサン・テプタード *Saint-Eptade de Cervon*、カッシアロのサン・マルタン *Saint-Martin* (*de Cassiac*)、メーヴルのサン・マルタン *Saint-Martin de Mesvres*, *S. Martinus de Magavero* 及びクーシィのサン・ジョルジィ *Saint-Georges de Couches*, *S. Georgius Colicense* である。<sup>168</sup>

31、シャルル・ル・ショージュは、八四〇年七月と八四一年一月にブルジュに滞在した。大司教座であるブルジュ（アキタニア第一）は、八三九年の分割では当然シャルルに属する筈ではあるが、この大司教座の帰属には微妙な

問題がありそうである。我々は八三九年～八四〇年の大司教を特定し得ない。聖ロドゥルフスの大司教就任は八四〇年六月（ルイ・ル・ピウの死）<sup>170</sup>以前ではなく、八四一年一月以後でもない。<sup>169</sup>またその前任者アイウルフスの歿年が明らかではないので、<sup>170</sup>八四〇年七月にこの大司教座は空位であった可能性もある。しかも、ブルジュを中心とするベリリ地方が、ビピン二世が好んで滞在した地方であるという一般的な断定は、この王が、彼の *fidelis* であり、ピピン派でもあるケルシー *Quercy* 伯家の出であるロドゥルフスを、ブルジュ大司教としたという推定と関連しているようである。<sup>171</sup>

第一にこのロドゥルフスがビピンの *fidelis* であるという断定は、八四〇年七月二九日付のビピン二世の文書<sup>172</sup>に見られる《*quendam fidelem nostrum, Rodulfum nomine*》, 《*eidem fidei nostro, Rodulfum nomine*》, 《*memorato predictoque fidei nostro, Rodulfum nomine*》に基づいている。彼が大司教就任以前に、何れかの、おそらくはソリニャック *Solignac* 修道院長であったとすれば、<sup>173</sup>如上の一切の肩書きを欠く表記は奇異である。又彼はケルシー伯ラウル *Raoul, Rudolphus* の長男であり、<sup>174</sup>当該ケルシー伯が八四〇年乃至八四四年まで生存していたとすれば、<sup>175</sup>上記八四〇年七月の文書の *Rodulphus, fidelis noster* が、大司教ロドゥルフスの父であった可能性が残る筈である。ブルジュ大司教としてのロドゥルフスの選任は、八四〇年七月から八四一年一月の間に、シャルル・ル・ショーヴと、<sup>176</sup>当時ビピン二世を保護していたケルシー伯家との間で合意された、極めて政治的な行為ではなかったであろうか。<sup>177</sup>こう考えることによって、大司教となって数年後に、<sup>178</sup>彼が、自らのデーヴル *Dèvre, Vierzon, Do-*  
*verense, nunc Virzionense* 修道院に対して行った寄進の確認を、シャルル・ル・ショーヴに求めた理由を理解し得よう。<sup>179</sup>八四三年乃至八四四年に、レストレ（サン・ジュヌー）*L'Estrée, Saint-Genou, Stradense, S. Genulfus* 修道院長ドドは、<sup>179</sup>ビピン一世が当該修道院に与えた *immunitas* 文書の確認を、シャルル・ル・ショーヴに求めた。さ

らに八五五年（九月二九日）に自らシャルル・ル・ショージュの息子シャルル・ル・ジュヌをアキタニア王に聖別したロドゥルフスは、サン・シュルピス Saint-Sulpice, S. Sulpitius 修道院に対する寄進の確認を、シャルル・ル・ショージュに求めている。<sup>180</sup>ロドゥルフスと彼の大司教管区のシャルル・ル・ショージュに対する対応は、ほぼ一貫したものと認められ、従って後者の權威は、八四〇年から、この大司教管区の、少くともクレルモン以北では認められていたと考えるべきであろう。<sup>181</sup>

32、八一七年以来ピピン一世の下にあつて、八三九年にシャルル・ル・ショージュの手に渡ったヌヴェール（サンス大司教管区）は、急速にこの事態に順応したように思われる。当該年度の司教は、八四一年のそれと同じく、ヘリマンヌスであつたと考えてよからう。<sup>182</sup>シャルル・ル・ショージュは、八四一年一月にブルジュに赴こうとしてヌヴェールを通り、そこでベルナル伯 Bernard de Septimanie を待った。<sup>183</sup>さらにシャルルは、ここでヘリマンヌスの請願をうけて、八四一年一月一二日にブルジュで、ヌヴェールの教会に対して文書を發給している。<sup>184</sup>

当該管区には、非常に多数の修道院があつた模様であるが、<sup>185</sup>八四〇年前後に存在したそれらを特定することは出来ない。ヘリマンヌスは、八四九年に司教座教会堂サン・シール Saint-Cyr de Nevers <sup>186</sup>に六〇人、サン・マルタン Saint-Martin, S. Martinus 修道院には一六人の参事会員 canonici を定住させ、同時に、多くの「彼の座に属する他の修道院に」住む参事会員や修道士修道女に対する給養を定めて、これをシャルル・ル・ショージュが確認した。<sup>187</sup>

148 特にリヨンそのものは、シャルル・ル・ショージュの取り分にも、ロテールの取り分にも属している。前注17。

149 G. C., IV, col. 55-59; D. F., II, p. 172; Mgr Bessoules, *Saint Agobard, évêque de Lyon (760-841), Doctrine et action politique d'Agobard*, Paris, 1949. 前注参照。

150 G. C., IV, col. 224, 234-235, 254-255, 260, 270-271.

151 エネーの修道院長アウレリアヌス S. Aurelianus は、シャルトル司教管区のボンヌヴァル修道院長ガウスマルスと関係を

有する (G. C., IV, col. 234)°。サントニ修道院長ダウニット David は G. C. によれば「シャルル・ル・ショーズの第二年」anno 2. Caroli Calvi 48<sup>ne</sup> manus を西ノリヤウスで書いた (Ibid., col. 260.)°。

- 152 G. C., IV, col. 529-533; D. F., II, p. 139. Cf. *Loup de FERRIERES, Correspondance*, I, p. 122-129, n° 26, surtout p. 129, n. 3. Lévilain はこの版におづべゝこの書簡 (サンス大司教とベルナル伯からリヨン大司教宛) の年代を八四三年から八四二年に變えた。従つてラングル司教ナウトバルドウスの就任年代は、さらに一年遡つて、八四一年とも考えられる。(Cf. *Ibidem*, p. 122, n. 2.)

- 153 G. C., IV, col. 672. Cf. Gras (P.), *Le séjour à Dijon des évêques de Langres du V<sup>e</sup> au IX<sup>e</sup> siècle. Ses conséquences sur l'histoire de la ville, ds. Recueil de travaux offert à M. Clouis Brunel par ses amis, collègues et élèves*, I, Paris, 1955, p. 552.

154 G. C., IV, col. 660.

155 G. C., IV, col. 696; col. 705; col. 720-721.

156 G. C., IV, col. 874-875; D. F., II, p. 195. なお前注155所掲「八四二年のサンス大司教及びベルナル伯からリヨン大司教宛の書簡 (surtout p. 128 et n.2) を参照せよ」。

156a BAZIN (J.-L.), *Histoire des évêques de Chalon-sur-Saône*, t. I, Chalon-sur-Saône, 1914, p. 90-93.

G. C., IV, col. 957-958, 961-962.

158 G. C., IV, col. 1044; D. F., II, p. 198.

159 G. C., IV, col. 1045-1046; D. F., p. 198.

160 G. C., IV, Instr., col. 265-266, n° V.

161 G. C., IV, col. 1109.

162 森 洋「シャルル・ル・ショーズ、八四〇年——ヴァルタン条約前史——」『史淵』第百十八輯、一六六頁。加えて *Auzias, op. cit.*, p. 135 et suiv.; LEVILLAIN, *Les Nibelungen historiques*, p. 29. を参照。

163 CHAUME, *op. cit.*, p. 872-880, «pagus Avalensis»; トヤトロンは一時オートキヤルに同教管区に帰属した。LEVILLAIN, *Pépin I<sup>er</sup> et Pépin II*, p. CLXVIII et suiv.

164 *Loup de FERRIERES, Correspondance*, I, p. 98-101, n° 17.



p. 79 et n. 1.

172 LEVILLAIN, *Pépin I<sup>er</sup> et Pépin II*, p. 198-200, n<sup>o</sup> 1; Cf. Auzias, *op. cit.*, p. 129, n. 12.

173 G. C., II, col. 24-25; Deloche, *op. cit.*, p. CCXIX-CCXX

174 Deloche, *ibid.*, p. 269 et suiv., n<sup>o</sup> CCXIII, *Notitia de parentela Rodulfi archiepiscopi...*

175 Auzias, *op. cit.*, p. 128 et n. 8. 等は「ケルシー伯ラウールの没年を八四〇年頃としたが」 Bousard, *art. cit.*, p. 103. は「

Deloche, *op. cit.*, p. 66 et suiv., n<sup>o</sup> XXXIV. (八四四年二月「ラウール伯の未亡人アイカナ Aigana の寄進文書」) に「

「八四四年を没年とする」。しかし Deloche の紀年は「一年ずれる傾向があるから、八四三年をうけた方が無難である」と。

176 八三八年から八三九年一杯「ジョン二世はフィシャック Figeac の修道院にいた。 LEVILLAIN, *Pépin I<sup>er</sup> et Pépin II*, p. CLXXVII, p. 185 et suiv., n<sup>o</sup> XLIX.

この仮定は「前注①にあづいた二文書の紀年法の相違と、特に大司教ロドゥルフスが「シャルル・ル・シローヴの統治紀年を用

いた理由」を説明するかも知れない。

177 Tessier, *Charles le Chauve*, I, p. 115-118, n<sup>o</sup> 42. この文書は G. C., II, col. 136. は八四三年に「Tessier は——彼が

たロザルンヌやジョン二世の *fideliis* であると確信していたが故に——八四四年五月に「非常な苦心をもちて位置つけた

(p. 116)。Deloche, *op. cit.*, p. CCXXIV. は「この大司教が八四三年から八四八年までは少くとも「ビジンの側においたと

するが、彼はこの文書を如何に位置したのかわからない。

178 Tessier, *Charles le Chauve*, I, p. 147-148, n<sup>o</sup> 51, [343, 20 juin-844, 20 juin.] Cf. LEVILLAIN, *Pépin I<sup>er</sup> et Pépin II*,

179 p. 58-59, n<sup>o</sup> XVI; G. C., II, col. 145-146.

180 Tessier, *Charles le Chauve*, I, p. 469-479, n<sup>o</sup> 178, 855, 25 septembre, «*Ad illum Casnum*». Tessier は本文書に「前注

①⑧所掲の文書との酷似を指摘し「ロザルンヌが後者を「いわばサンプルとして「シャルル・ル・シローヴの文書局に提示し

たとえ「仮説を支持し「*ibidem*, p. 472.」 Cf. G. C., II, col. 126.

181 G. C., II, col. 26; Deloche, *op. cit.*, p. CCXXV. 等は「教皇ニコラス一世がロザルンヌを「*primas Aquitaniarum* [et

Nardonensis]」とし「*patriarcha* の称号を与えた」といふ。筆者は「このことを裏づける教皇書簡を発見し得なかったが、

仮にこのことが真実であれば「八三九年にシャルル・ル・シローヴに割当てられたアキタニア以南に「あまねくブルジュ大

司教の権威が及んだ筈である。但し上記教皇は「八六四年のロドゥルフス宛の書簡 (Mansi, *Concilia*, t. 15, col. 390; J. W.

シャルル・ル・シローヴ「八四〇年 (終)



I, n° 2765 (2091) にせうじ' primates & patriarchae が他の司教以上の特権を有するを否定している点をも指摘して  
せななちればならぬ。上記の称号を' D. F., II, p. 31. は採りあげてゐる。

- 182 G. C., XII, col. 629-630; D. F., II, p. 485. 旧教ナルフレドヌスの名は、八三年までしか追えない（前注170所掲の文書）。  
クリンヌスの名は八四一年にちかづいてゐる（注181所掲の文書）。G. C. は両者の間にフーギー一世 Hugo I を置くが、  
D. F. ではこれを採らぬ。

- 183 NINHARD, II, 5; Cf. Lot-HALPHEN, *op. cit.*, p. 21.

184 Tessier, *Charles le Chauve*, I, p. 3-8, n° 2; Cf. Lot-HALPHEN, *op. cit.*, p. 21, n. 1. この一種の immunitas 文書が、  
「シャルベミツ・ルイ・ネ・ユウの文書の確認であるのにならぬ、ユン一世のそれの確認である点に注意。 Cf. LEVILLAIN,  
*Pépin I<sup>er</sup> et Pépin II*, p. 70. G. C. は「やうじ」八四三年一月二日にクリンヌスがシャルル・ル・ショージュから「*Privi-*  
*legium Caroli regis et pastoris electione*」を受けたる文書を得たことを（G. C., XII, col. 629; Instr., col. 299-300,  
n° III.） Tessier では「acte faux」(Tessier, *Charles le Chauve*, II, p. 528-533, n° 463.)。

- 185 G. C., XII, col. 666 et suiv.

- 186 G. C., XII, col. 629; Instr., col. 300-301, n° IV.

187 Tessier, *Charles le Chauve*, I, p. 333-335, n° 126. 850, 24 mai, Verberie; G. C., XII, Instr., col. 302, n° V. クリッ  
ヌスの個人財産とヌヴァールの教会財産から、彼らに対する給養を設定する決定は、八四九年におこなわれてゐる。 Cf. Lot-  
HALPHEN, *op. cit.*, p. 218, n. 5.

# III

先に挙げた八四〇年八月一日付の、フェリエール修道院長ウードがオルレアン司教ヨナスに宛てた書簡は、俗人  
で、シャルル・ル・ショージュの側についた人々の消息を伝えている。クレルモンでは、オータン司教モドイヌスと  
ともに、アヴァロン伯オーベル Aubert, Aubertus が指揮をとっていた。リモージュでは、故ピピン一世の prin-  
ceps et carus であつたシニール Gérard, Gerardus が指揮をとつてゐる。アングレームでは、ルノー伯 Renaud

Rainaud, Reinoldus comes が指揮をとった。さらにこの書簡は、シャルル・ル・ショージュが、八月一日にはトゥールのサン・マルタン修道院にあり、さらにオルレアンへ向うであろうことを、文書局長ルイ *magnae indolis Ludovicus, epistolare in palatio gerens* からの情報として伝えているから、このルイも、親シャルルの立場をとっていたのであろう。<sup>188</sup>

オーベルの名はこの時にしか現れないが、その他の人物に関しては、我々は多くのことを知っている。ジェラルドはオーヴェルニュ（クレルモン）伯であり、ピピン一世の「第一人者にして側近」であった。<sup>189</sup>彼はまた、ルイ・ル・ピウの娘と結婚し、従ってピピン一世の義理の兄弟であった。彼は八三九〜八四〇年にはいち早くシャルル・ル・シヨヴの側についていたが、八四一年六月二五日のフォントノワの戦いでは、ピピン二世・ロテールの側で戦死している。<sup>190</sup>ルノーはエルボージュ Herthange 伯で、八三九年からルイ・シャルルの側にあり、八四一年にシャルルは、ナント伯ランベール二世 Lambert II を退けて彼をナント伯とした。彼はさらにマルムーチエの俗人修道院長となつたが、八四三年にランベール二世と戦つて死んだ。彼の家系はルノー・エ・エルヴェ家と呼ばれ、弟ヴィヴィアンはトゥールのサン・マルタンの俗人修道院長として、トゥール伯を兼ねていた。<sup>191</sup>

注目すべきは、この時の前線基地の選択である。リモージュ・アングレーム・オーヴェルニュ（クレルモン）は、ほぼ東西に一直線につながつて、アキタニアを南北に二分していた。しかもそれぞれの指揮は、その地を管轄している司教または伯にゆだねられなかった。リモージュには、リモージュ伯で彼もまたピピン一世の《*genet*》であるラティエ Ratier に代えて、オーヴェルニュ伯ジェラルドを、アングレームには、同地の伯チュルピオン Turpion に代えてエルボージュ伯ルノーを、オーヴェルニュにはオータン司教とアヴァロン伯とが送られたのである。チュルピオンが間もなくシャルルを捨てたのに対して、ラティエは、八四一年のフォントノワの戦いで戦死するまでシャルルの側にあつた。<sup>192</sup>

文書局長ルイはル・マン伯ロルゴンとシャルルマーニユの娘ロトリユードの間に生れた庶子である。従って彼はロルゴン家に属するとともに、シャルル・ル・ショージュやその兄弟たちにとっては従兄弟にあたる。彼の文書局長就任は八三九〜八四〇年であり、八四〇年十月、サン・ドニ修道院長ヒルドウィヌスがロテール派に奔った後にはサン・ドニ修道院長となり、サン・ヴァンドリュ修道院長としてはヨセフス「大司教」の跡をつぎ（八五三又は八五四年）、歴代文書局長と同じく、リクボドをついでサン・リキエ修道院長ともなった（八四四年）<sup>193</sup>。ウード書簡の調子から判断して、彼は八四〇年に明らかに親シャルル的であつたと思われる。

ウードの書簡はさらにこの頃「グンボルとユーグが王の許に歎願して帰参し、各自の職を恢復したものと考えられる」<sup>194</sup>と報じた。グンボル Gunbold, Gunboldus は、ムーズ・エスコー両河の間、すなわち八三七年の分割におけるシャルル・ル・ショージュの取り分の北辺の伯の一人である。<sup>195</sup>当該方面の境界決定は、おそらく困難を極めたのである。ユーグ Hugo, Hugue はサンス伯であつたと思われる。<sup>196</sup>最後にこの書簡は「当該王（シャルル）が、もしも生命があるならば、八月二四日に、キエルジーに着くことを決定した」<sup>197</sup>ことを報じている。

七月にシャルル・ル・ショージュはブルジュで、ピピン二世との会合を策するとともに、ここからニタールとオージェ Augier, Aldegarius とをロテールの許に使者として送り出した。<sup>198</sup>ニタールは、サン・リキエ修道院長アンギルベルトゥスと、シャルルマーニユの娘ベルタとの息子であり、従ってロテール、ルイ・ル・ジェルマニック、シャルル・ル・ショージュ兄弟の従兄弟にあたる。彼がサン・リキエの advocatus であつたこと、彼が終始シャルル・ル・ショージュの側にあつたことはすでに述べた。<sup>199</sup>オージェは、彼もまた、ムーズ・エスコー両河の間の伯の一人であつたかも知れない。彼ら二人はロテールから臣従を強請されたが、「忠誠をやぶって彼につくこと」を拒否したので、<sup>200</sup>ロテールは彼らの職を剝奪した。<sup>201</sup>

ムーズ・セーヌ両河の間の住民は、シャルル・ル・ショージュがロテールに先んじて到着することを希望し、シャルルは予定通りにキエルジーに着いた。しかしその時、シャルボニエールの森<sup>a</sup>を境として、その西の住民はシャルルを歓迎したが、東の人々はシャルルから離反し、ロテール側についた。マースガウ伯ジルベール<sup>b</sup> Gilbert, Gislebertus 以下、ムーズ・エスコール両河の間の伯たちと思われるエランフリド Herenfrid, Herenfridus, フーヴ Beuve, Bovo 等が、サン・ジョスの俗人修道院長オドゥルフス伯<sup>c</sup>の煽動によって、「誓った信を無視して」離反したのである。<sup>202</sup>このシャルボニエールの森の線での分断は、例えばニールング家のように、ムーズ川の北、エスベイ La Hesbaye に発生地を有しながら、オータン伯を多出させたような伯家系に、重大な支障を与えたことであろう。<sup>203</sup>

シャルル・ル・ショージュはキエルジーで、母ユーディットがピピン二世の攻撃を受けたことを知り、急いでアキタニアに引返したが、その際ロテールの許に、ユーグ、アラール、ジェラル Gerard, Gerhardus、エジロン Egilon Hegilo の四人を使者として送り、「神と父（ルイ・ル・ピウ）とが、彼（ロテール）の同意の下に彼（シャルル）に与えた王国をとことん混乱させることによって、彼の臣下たちを、彼から離反させないようにと願った。」<sup>204</sup>

ここに登場するユーグは、おそらくユーグ・ラベである。彼は、すでに述べた如く、シャルルマーニの庶子であり、サン・カンタン Saint-Quentin, S. Quintini、サン・ペルタン、ロップ Lobbes, Abbatia Laubiensis の修道院長であり、ルイ・ル・ピウ治世の最後の六年間文書局長であった。彼は、八四四年六月一四日にトゥールーズで戦死するまで、シャルル・ル・ショージュの側にいた。<sup>205</sup>アラールは、すでにトゥールのサン・マルタン、マルムーチエ<sup>206</sup>修道院長として言及したセネシャル・アラールである。エジロンはムーズ・エスコール両河の間の伯の一人であり、ジェラルはパリ伯であった。

アラールとジェラルは兄弟であったようである。彼らはさらに、その姪エルマントリューズ——Ermentrude、





202 NITHARD, II, 2, p. 42: «Quamobrem cum perpaucis Karolus hoc iter accelerans ab Aquitania Carisiacum venit et

a Carbonarius et *infra* ad se venientes benigne suscepit. *Extra* vero Herenfridus, Gislebertus, Bovo ac ceteri ab Odulfo decepti, *firmam fidem neglegentes, defecerunt*». [「イタリック」筆者]。この部分の「*infra*」を「次の文章の冒頭の「*extra*」と対照的」として「*infra*」と「*extra*」を同じくする意見があったが、Lot-Halphen, *op. cit.*, p. 17, n. 2. に否定的な意見が述べられている。これは主として NITHARD, II, 6. の対照による。

a Forêt Charbonnière については、Morau, *op. cit.*, v°. を参照。この森は当時ムーズ川とサンブル川の北に広がり、エスコールとアルデンスの間の、すなわちウストランとネウストリアとの自然境界をなしていた。

d シルヴェールは NITHARD, III, 2, p. 90. v° comas Mansuaticorum と記載されている。モースガウは八三七年の分割でシャルルの取り分となっていた。

c オドゥルフスについては、前注5)を併せ見よ。尚、サン・ジョス修道院 cella Sancti Judoci はルイ・ル・ピウがフェリエール修道院に与え、それをシャルル・ル・ショージュ自身が「ある必要から」quadam necessitate オドゥルフスに与えた。他方シャルル・ル・ショージュは、すでに八四一年五月一〇日に同修道院がフェリエールに帰属すべきことを認め (Tessier, *Charles le Chauve*, I, p. 9 et suiv., n° 3) ながら八四三年十二月二十日にオドゥルフスの死後フェリエールに返還されることを認めた (*Ibidem*, p. 74 et suiv., n° 30) この文書の発給には、seneschallus アラルが仲介し、その後フェリエール修道院長ルイの度重なる懇願で、ユーク・ラベ、文書局長ルイ等主の肉親の介入が続けられたが、最終的な返還は、八四七年三月以後まで遅れた (*Ibidem*, p. 75-76)°。尚、これら一連の文書の年代関係については、Cf. Giry (A.), *Etudes carolingiennes*, II, Date de l'abbatit de Loup de Ferrières, ds. *Études d'Histoire du Moyen Age dédiées à Gabriel Monod*, Paris, 1896, réimp. Genève, 1975, p. 116.

203 LEVILLAIN (L.), Les Nibelungen historiques et leurs alliances de famille, ds. *Annales du Midi*, t. 49 (1937), p. 337-407, t. 50 (1938), p. 5-66. 以下 t. 49 (1937) 所収の分や LEVILLAIN, Les Nibelungen, I, t. 50 (1938) 所収の分や LEVILLAIN, Les Nibelungen, II, の区別がある。王国の分割と際について、東部地に派遣された伯爵たちは、各地の自由地 (alléux) の保持のため、この困難について、cf. FAVRE (E.), La famille d'Evrard, marquis de Froul, dans le royaume franc de l'ouest, ds. *Études d'Histoire du Moyen Age dédiées à Gabriel Monod*, p. 155 et suiv.

NITHARD, II, 3, p. 42-44: «Eodem tempore missus ab Aquitania venit nuntians quod Pipinus cum his qui parti

sue favebant super matrem Karoli irruere vellet; ac per hoc Karolus, Francos inibi omittens, mandat, si illos, frater suus, donec reverteretur, opprimere vellet, obviam sibi procederent. Insuper ad Lodharium Hugonem Adelhardum, Gerhartum et Hegilomem direxit cunctaque que tunc nuper illi mandaverat replicans necnon et pro Deo deprecatus est ne, suos sibi subtrahens, regnum quod Deus paterque suo consensu illi dederat amplius dissipet.」〔「マニハム」筆写〕。

205 Tessier, *Diplomatique*, p. 44; Lot-Halphen, *op. cit.*, p. 114-115; Simson, *a. a. O.*, II, S. 238-240; G. C., III, col. 490. 彼が修道院長職を有していた諸修道院は「ランス大司教管内で」最も civitas の定立が困難な部分である。したがって彼は当該地方の大修道院長職をほとんど独占していたのである。近 G. C., III, col. 82; G. C., IX, col. 1038 sq. など ロマン語については彼の名を述し「サン・カンタンの修道院長名を十二世紀以降からいさぎよく消すところ」。

本稿一三八頁参照。

207 前注別参照。

208 シャルル・ル・シヨーズの王妃の田舎でつづき、オットー・ハルペン伯の娘であることの上では「アールの娘」とのみ記す。Nirnard, IV, 6, p. 142: Accepit quidem Karolus, uti praefatum est, in conjugio Himenitridem Uodomis et Ingeltrudis filiam et neptem Adelardi; *Ann. Bert.*, a<sup>o</sup> 842, p. 43: Karolus Carisiacum palatium veniens, Ermendrud, neptem Adalardi comitis, uxorem ducit... Cf. Lot-Halphen, *op. cit.*, p. 60, n. 5. トーニヌス伯の「アールの」の關係は、八六〇年代のシヨールと彼の妻グルトの「文書」で述べられていた。QUANTIN (M.), *Certitude générale de l'Yonne*, t. I, Auxerre 1854, p. 80; Cf. LEVILLAIN, *Les comtes de Paris*, p. 190 et n. 184. この文章の交差している「*Ibidem*」, p. 189-196; Id., *Les Nibelungen*, II, p. 41 et suiv.; Pourardin, *op. cit.*, p. 26 et *passim*.

209 NIRNARD, II, 3, p. 44:... Hilduinus abbas Sancti Dyonisii et Gerardus comes Parisi civitatis, a Karolo deficientes, fide frustrata ad illum (Lodharium) venerunt. Cf. BONMER-MONTEBACHER, *Regesta*, S. 435, Nr. 1073 (1039)d; Lot-Halphen, *op. cit.*, p. 18-19. このシヨールはその後「キヤン」の宿敵になる「キヤン」条約後、ロレーンと「フ」ウエント伯「リオン」伯に任せられた。武勳詩にあらわされる Gérard de Roussillon とは彼の同じである。この人物については、特に文学史からの研究が多数あるが、ここでは「Louis (R.), *Girart, comte de Vienne (... 819-877) et ses fondations monastiques*, t. I, Auxerre, 1946. のみを挙げておく。



210 本稿二三八頁、及び注128。

## IX

シャルル・ル・ショールヴとロテールとは、八四〇年十一月以降にオルレアンで対陣し、ロテールは「シャルルに、アキタニア、セプティマニア、プロヴィンキア、およびロワール・セーヌ両河の間の一〇伯管区を譲」って事を収めようした。<sup>211</sup> このことを不満として、忠誠解除によって対抗しようとしたシャルルの *primores* を、我々はここで可能な限り特定してみたい。これまでの行論から、この時にシャルルの身辺にいたと思われるのは、ニタール、文書局長ルイ、ユーグ・ラベ、セネシャル・アラール、ル・マン司教アルドリクス、オータン司教モドイヌス、アヴァロン伯オーベル、オーヴェルニュ伯ジェラル、エルボーージュ伯ルノー、オルレアン伯ウード、ムーズ・エスコー両河の間の伯たち、すなわちオージェ、エジロン及びグンボールの三人である。<sup>211a</sup> さらに我々はこの時ロテールから提示されたシャルルの取り分を、具体化することが出来るよう。アキタニアとは、クレルモン・リモージュ・アングレームを結ぶ線から北を意味する。このことから上掲の人名には、リモージュ伯ラティエとアングレーム伯チュルピオンが加えられる。この部分は、八三九年の決定後、直ちにルイ・ル・ピウ自身が乗り出して、おそらくはシャルルの *apannage* とした部分である。その線の南には、ケルシー伯に保護されたピピン二世がおり、セプティマニアにはベルナールがいた。<sup>212</sup> セーヌ川以北の一〇伯管区とは、たまたまシャルルの許に亡命していた司教アルドリクスの、ル・マン管区を指すものである。従って八四〇年十一月段階で最も不安定な状況におかれたのは、八三七年分割案の北辺を形成するムーズ・エスコー両河の間の伯たちであり、八三九年分割案によってシャルルに宛てられた部分——例えばオータン司教やアヴァロン伯——は、シャルルに忠誠であった。<sup>213</sup>

八四〇年十一月にシャルルの *primores* が破棄しようとした宣誓とは、如何なるものであったであろうか。八三七年にシャルルの取り分として指定された「部分に *beneficia* をもつ司教、修道院長、伯及び王のヴァッサルたちは、〔ルイ・ル・ピウ〕帝の命令により、彼の前でシャルルに託身し、宣誓によって、忠誠を確約した。」<sup>214</sup>八三八年に、ネウストリアの *primores* は、シャルルに「手を与え、宣誓によって忠誠をかため、居あわせなかったものの何人かも、後に同様になした。」<sup>215</sup>八三九年の記事に類似の言及はないが、<sup>216</sup>ここでもまた同様に、当該部分に *beneficia* をもつものの託身と、それに伴う忠誠誓約があったと前提し得るであろう。従ってこのコンテキストで問題となる戦術的な忠誠破棄もまた、*beneficia* を持つものの託身放棄をしか意味せず、その効果は、シャルルの *primores* にとつては、万一の場合の *beneficia* 保持の継続を可能にするとともに、ロテールに捕えられた場合に、宣誓違反の罪を問われ、あるいは *beneficia* 没収をもって脅迫される危険を避けて、身軽になることであったと理解し得よう。事実この時以後、オーヴェルニュ伯ジェラルとグンボールとは、ロテール側に移った。<sup>217</sup>

以上から我々は、託身に伴う忠誠が当時決して終身の拘束力をもたなかったことを確信するとともに、この忠誠がかった王（帝）国全臣民の忠誠にとって代ったとする解釈にも疑問を抱かねばならない。<sup>218</sup>八〇六年以来、いわゆる「分国令」は、一貫して一人の王にのみ託身すべきことをヴァッサルたちに命じ、——世襲財産 *hereditas* の保持<sup>219</sup>は認められているが、——*beneficia* はこれを、各人の属する *regnum* においてのみ保有すべきことを命じて来た。このことは、分割のあり方如何が、直ちに王のヴァッサルである伯個人、あるいは伯家系全体に致命的な打撃を与え得ることを意味する。パリ伯ジェラルの行動は、このことによって説明され得るであろう。

教会のこの問題に対する対応は、純理的なそれと現実的なそれとに分れた。ランス大司教エボと、サン・ドニ修道院長ヒルドウイヌスの理念は、セーヌ以北を一挙にシャルル・ル・ショーヴから引きはなした。リヨン大司教管区に

属する部分も、仮にアゴバルが充分に健康であり、多くの司教位がたまたま空位でなかったならば、その帰趨は疑わしい。純理派を支えた理念は、八一七年の *Ordinatio Imperii* と八二九年のバリ第六公会議とが打出し、完成した教会・帝国統一の理念であったと考えられる。長兄ロテールは八一七年にすでに皇帝に任ぜられ、八二五年にはローマで教皇の聖別を受けていたのに対して、他の兄弟たちは、——それぞれ *apanages* とともに——「王の名を与えられる」に留っていた。<sup>220</sup> 八四〇年六月にルイ・ル・ピウが死んだ瞬間において、教会の眼から見て当事者能力のある存在は、ロテール以外にない。遺言に基づく分割の実施は、ロテールの意図と承認によって行われるべきだとする立場は、少くとも教会人にとって、充分に成立し得るものであった。代襲相続規定の適用を受けるべきピピン二世の立場は、さらに弱い。代襲相続については、八〇六年以降明瞭な規定が存在している。八〇六年と八三一年の規定は、当該「王国」のポプルスによる選挙と、亡父の兄弟たちの同意とを要求しているし、八一七年の規定は、明瞭に、その執行をロテールに委ねている。<sup>221</sup> 従ってピピン二世は、無条件にピピン一世の後継者たることを主張し得なかった筈である。

如上の考え方からすれば、八四〇年後半において、ロテールの地位以外に定まったものは何一つなく、ルイ・ル・ピウの遺言執行に当たっても、当事者能力あるものは彼一人であった。教会がこの見解をとった場合に、周囲の人々に対する説得は比較的容易なものであったであろう。我々はむしろ、シャルル・ル・ショーズに余りにも近かったニタールの記述に、過度の感情移入をすることを戒めるべきであろう。

シャルル・ル・ショーズが、託身に伴うそれではない、真の王に対する忠誠誓約を臣下に期待し得る時期は何時であらうか。それはおそらく、教会による塗油<sup>222</sup>が行われた後でしかないであろう。

シャルル・ル・ショーズ研究を筆者に慫慂されたのは、ルマリニエ教授である。同教授は、一九八〇年六月一九日

に急逝された。筆者は本拙稿を、同教授の靈に捧げたいと思う。

211a 前掲拙稿一六〇頁、及び注7。

212 グンボールはカロワ伯であつた可能性もある。前注195。

213 アキタニア王権の問題と Bernard de Septimanie をめぐる問題は、本稿では意識的に避けた。別稿を期す。

このことは、サン・マルセル・レ・シャロン修道院長、シャロン・シヤル・ソーム伯、マコン伯ケランの行動によつてよりよく示される。彼は八四一年に、シヤルルを決定的優位に立たせる働きをした。NITHARD, II, 5, p. 50; LOT-HALPHEN, *op. cit.* p. 21 et suiv.

214 *Ann. Bert.*, a° 837, p. 23: Sicque iubente imperatore in sui presentia episcopi, abbates, comites et uassalli domini in memoratis locis beneficia habentes Karolo se commendauerunt et fidelitatem sacramento firmauerunt. (「タタリニ」筆著)。

215 ASTRONOMUS, c. 59, S. 643: Et praesentes quidem Neustriae provinciae primores Karolo et manus dederunt, et fidelitatem sacramento obstrinxerunt, absentium autem quisque postea iidem fecit. (「タタリニ」筆著)。

216 *Cf. Ann. Bert.*, a° 839, p. 32.

217 ジェラールは八四一年六月、ロテール側についてファントノワで戦ひ、戦死した。Cf. LOT-HALPHEN *op. cit.*, p. 35, n. 4. グンボールについては前注195。

218 Cf. GANSHOF, *Qu'est-ce que la féodalité?* 4<sup>e</sup> éd., Bruxelles, 1968, p. 33, 45, 54, 57 etc.

219 BORETUS, *Capitularia* I, n° 45, Divisio Regnorum, 806, cc. 8, 9, p. 128; *Ibidem*, n° 136, Ordinatio Imperii, 817, c. 9 p. 27; BORETUS-KRAUSE, *Capitularia*, II, n° 194, 831, cc. 4, 5, p. 22.

220 BORETUS, *Capitularia*, I, n° 136, p. 271, [Praefatio]: Ceteros vero fratres eius (Hlutharii), Pippinum videlicet et Hludowicum aequivocum nostrum, communi consilio placuit regis insigniri nominibus, ... シヤルルは八三八年の成人の際に *insigna* として corona regalis を与へられた。ASTRONOMUS, c. 59: Ubi domnus imperator filium suum Karolum armis virilis ... cinxit, *corona regali caput insignivit*, ...; *Ann. Bert.*, a° 838, p. 24: Karolo, tunc cingulo insignito, ... 同記叙の相違は、この行文中に *insignivit* シヤルルは王の冠のついた王冠を解釈するのではなくて、

221 BORETUS, *Capitularia*, I, n° 45, c. 5; p. 128, n° 194, c. 14, p. 272-273; BORETUS-KRAUSE, *Capitularia* II, n° 194, c. 1, p. 21-22.

222 LEVILLAIN (L.), Le sacre de Charles le Chauve à Orléans, ds. *B. E. C.*, t. 64 (1903), p. 31-53, 15° *Ann. Berl.*, a°

848, p. 55. によりつて、これをアキタニア王としての塗油であるとする諸説 (p. 32, n. 2) や、八四〇年十二月二日を塗油の日付とする諸説 (p. 32, n. 4) に対して、八四八年六月六日を塗油の日付とする。八四八年をアキタニア王としての塗油の日付とすることは、八四一年の復活祭 (四月一七日) に、トロワ滞在中のシャルルの許にアキタニアから奇跡的に王の insignia がもたらわれたという NITTHARD, II, 8, p. 60. の記事と調和しないし、八四〇年十二月説には根拠がない。これが事実ならば NITTHARD, II, 5. が言及している筈である。